

第3回生存科学シンポジウム

未来への 懸け橋

よく生きるための
倫理をひもとく

— プログラム・抄録集 —

日時 2015年 12月 12日(土) 13:00~17:00

会場 一橋大学 一橋講堂 (千代田区一ツ橋)

第3回生存科学シンポジウム

未来への懸け橋

よく生きるための倫理をひもとく

日時

2014年12月12日(土) 13:00 ~ 17:00

会場

一橋大学 一橋講堂

プログラム

- 13:00~13:05 開会の辞 松下 正明
- 13:05~13:55 基調講演 生命文明における生存科学 青木 清
- 13:55~14:05 休憩
- (総合司会: 笠貫宏・小島静二)
- 14:05~14:35 21世紀の科学技術のあり方 小泉 英明
- 14:35~15:05 環境倫理の過去・未来 加藤 尚武
- 15:05~15:35 修復医学に学ぶ生命倫理 浅野 茂隆
- 15:35~16:05 会える別れと会えない別れ 佐藤 雅彦
- 16:05~16:15 休憩
- 16:15~16:55 パネルディスカッション
- 16:55~17:00 閉会の辞 丸井 英二

開催にあたり

高度化かつ複雑化する社会において、真偽や善悪が混沌とする膨大な情報によって、未来への不安、人間そして人類の危機を実感しているヒトは少なくないのではないのでしょうか。例えば、福島原発事故や地球温暖化やシリア難民等々の問題は直近の未来さえ見えてきません。これらは、人間の“生きること survival”のみならず“よく生きること well being”という人間の尊厳に関わる喫緊の課題なのです。

生存科学とは、45年前に故武見太郎先生が提唱された「ひとり個人の生存のみならず、同時代の地球上のすべての人びと、そして世代を超えて、人類のより健全な、より人間らしい生存を目標として、既存の科学、それも自然科学のみならず社会科学、人文科学、さらには哲学・宗教・芸術までもを含めた全人間的知識の見直しと統合を科学的に行おうとする学問体系概念モデル」です。

生存科学は21世紀に生きる人類が抱える多くの課題解決を可能にする学問だと思います。

人間界においては、物理界そして生物界と根本的に異なることは、人間が「自ら自らを考える」ことです。20世紀に急速な進歩を遂げた科学技術による文明の力を謳歌する人類は人間にとって最も大切なことを忘れてしまったかのようにさえ思われます。古代ギリシャのアリストテレス以来、人間は「自己とは、人間とは、人生とは何か」悩み苦しみ続けてきましたが、古今東西の永遠のテーマです。

日本はGDP世界3位の経済大国でありながら、国連幸福度は46位にすぎません。少子超高齢社会と家族という社会基盤の崩壊を迎え、さらに、将来少子多死という民族滅亡の可能性さえ囁かれています。

本シンポジウムでは、昨年の「未来からの反射」に続き、「未来への懸け橋」をテーマに取り上げました。

日本人に、今、最も求められているのは、「生存のための哲学・倫理」を学び考えることです。生命倫理学のリーダーであられる生存科学研究所理事長青木清先生に基調講演をいただき、科学技術の倫理について小泉英明先生、医学・医療の倫理について浅野茂隆先生、環境に係る倫理について加藤尚武先生、宗教と死に係る倫理について佐藤雅彦先生にご講演をいただきます。そして、生存に関わる広範な倫理について総合討論を行います。我々は「哲学」は難解のもの、「倫理」は個人的なものとして、考えることさえ避けているように思われます。本シンポジウムを通じて、「よく生きるための倫理をひもとき、自らの未来への懸け橋」を設計して頂くよう願っています。

シンポジウム実行委員長

笠貫 宏

シンポジウム実行委員会

公益財団法人 生存科学研究所

本研究所は、急速な科学の進歩により生じる新たな危機から人類をまもるため、凡ゆる領域から総合的に「生存」問題に取り組む研究所として、医師会会長を長く務めた故武見太郎先生により1984年に設立されました。その活動はホームページ(<http://seizon.umin.jp>)に掲載されています。

会員は生存科学に関する自主研究を様々な視点から行い、講演会、シンポジウム、あるいは学術誌「生存科学」を通じ、広く一般の方々とその成果を共有するよう努めております。



高桑栄松先生

高桑基金

日本経済全体が先の見えない闇に包まれていた2011年、生存科学研究所も設立以来の厳しい経済状況に直面しておりました。そのような窮状の中、高桑栄松会員(北海道大学名誉教授、元参議院議員)は、研究所の活動をサポートするため2012年に300万円をご寄贈くださり、「生存科学」という新しい学問分野をさらに発展させるよう、励ましてくださいました。

生存科学研究所ではこの貴重な寄付金で高桑基金を創設し、3年間、広く、一般社会に英知の結晶である『生存科学』のシンポジウムを開催することといたしました。

公益信託 武見記念生存科学研究基金

当基金は、故武見太郎先生が創造した生存科学の普及・発展を図ることを目的に1982年9月に生存科学研究基金設定準備委員会により設立されました。

爾来、当基金は、人類の将来を展望し、ライフサイエンスを中心としてそれに関連する人文科学及び社会科学を加えて総合的に「人類の生存」を考究する「生存科学」の確立と推進を目的に「武見記念賞」および「生存科学武見奨励賞」を創設し、生存科学とその関連分野で顕著な業績をあげた研究者または実践者の顕彰に取り組んで参りました。



故 武見太郎先生

実行委員



笠貫 宏
Hiroshi KASANUKI, MD

略 歴

1967年、千葉大学医学部卒業。1997年、東京女子医科大学循環器内科学講座主任教授、同大学付属日本心臓血管研究所所長、早稲田大学理工学術院教授を経て、現在東京女子医科大学学長。厚生労働省：薬事食品衛生審議会委員、薬事分科会委員、医療機器・体外診断薬部会会長、医療機器安全対策部会会長・安全対策調査会委員、ニーズの高い医療機器等の早期導入に関する検討会委員、医道審議会薬剤師分科委員。独立行政法人医薬品医療機器総合機構：専門委員、医療機器不具合検討会委員、医療機器の不具合評価体制に関する検討会委員。日本循環制御学会理事、日本医療学会常任幹事会議長など



小泉 英明
Hideaki KOIZUMI

略 歴

東京大学教養学部基礎科学科卒業(1971)。同年日立製作所入社。東京大学に博士論文を提出し理学博士(1976)。日立製作所基礎研究所所長(1999-2001)、同研究開発本部技師長(2003-2004)を経て、2004年から現職。この間、カリフォルニア大学ローレンス・バークレー研究所客員物理学者、東京大学総合文化研究科や先端科学技術研究センター他の客員教授、国立環境研究所監事、日本神経科学会並びに日本化学会他の理事、日本分析化学会会長などを歴任。大河内賞(3回)・科学技術庁長官賞(2回)・日経BP技術賞大賞他受賞。ローマ法王庁科学アカデミー創立400周年記念にて招聘講演。



小島 静二
Seiji KOJIMA

略 歴

1976年、日本歯科大学歯学部、卒業。1980年、日本歯科大学大学院博士課程「歯科理工学」修了。三井物産(株)本社・健康管理室、入局。1984年、小島歯科クリニック(銀座)開院。1986年、毎日新聞社・毎日グラフ、編集委員。2002年、小島びじゅつ室・企画室、主宰。2011年、小島歯科クリニック(雪谷)開院。



松下 正明
Masaaki MATSUSHITA, MD, PhD

略 歴

東京大学医学部卒業(1962)、都立松沢病院医員(1966)、東京都精神医学総合研究所副参事研究員(1973)、横浜市立大学医学部教授(精神医学講座)(1986)、東京大学医学部教授(精神医学講座)(1990)、東京都精神医学研究所所長(1998)、都立松沢病院院長(2001)、東京都健康長寿医療センター理事長(2009)



丸井 英二
Eiji MARUI

略 歴

昭和47年東京大学医学部保健学科卒業。昭和52年、東京大学大学院医学系研究科博士課程(疫学専攻)修了後、東京大学医学部助手(疫学講座)、東京大学医学部講師(国際交流室)を経て、昭和61年より2年間、米国ハーバード大学公衆衛生大学院研究員(国際保健)。平成3年、東京大学教授(留学生センター・国際保健学大学院(国際疫学)兼任)、平成8年、国立国際医療センター研究所・地域保健医療研究部 部長。平成12年、順天堂大学医学部公衆衛生学教室・教授。平成24年、人間総合科学学大学院人間科学部教授。現在に至る。専攻領域は、疫学、医学史、国際保健、地域保健、保健医療情報システム研究。現在、厚生労働省 新型インフルエンザ専門家会議委員など

生命文明における生存科学



青木 清

Kiyoshi AOKI

公益財団法人生存科学研究所理事長

人間総合科学大学名誉教授・上智大学名誉教授

略歴

1969年 北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了理学博士

1975年 上智大学理工学部助教授

1978年 上智大学理工学部教授

1980年 上智大学生命科学研究所所長

2003年 上智大学名誉教授

PONTIFICAL ACADEMY FOR LIFE(教皇立生命アカデミー)会員

日本生命倫理学会代表理事

人間総合科学大学副学長

上智大学生命倫理研究所所長・特任教授

主な著書

『生物行動の謎 帰巢,回遊,渡りのメカニズム』講談社ブルーバックス 1979

『脳と行動 ニューロエソロジー』朝倉書店 シリーズ脳の科学 1986

『ライフサイエンスのはなし』日刊工業新聞社 1987

『行動の生物学』裳華房 生命科学シリーズ 1988

『動物の心をさぐる ニューロエソロジーの世界』岩波書店 1988

『動物行動の謎 脳のしくみを発見する』日本放送出版協会 NHKブックス 1990

『生命倫理学』人間総合科学大学 心身健康科学シリーズ 2008

武見太郎先生は社会・文化・科学の各分野について造詣が深く、日本医師会会長を退任後、生存科学研究会において特に重要であると思われる課題を我々の前に提起された。その中に、私に与えられた課題の一つに「生存倫理」があった。

武見先生の「生存」は「辛うじて生きのびる」のではなく、もっと人間らしい生き方を指していて、科学的・文化的・哲学的な考え方に根差したものである。そして人類の未来に対する倫理上の責任を踏まえたものであった。

ライフサイエンスは日本語で生命科学と命名された。生命科学は1953年のワトソンとクリックによって遺伝子DNAの構造について二重らせんモデルが提唱されたところから始まったといえる。これによって遺伝子DNAの複製のメカニズムが化学的・物理的に解けるようになり、生物の持つ遺伝という現象が物理化学的な物質現象として理解されるようになった。このことで生命現象そのものを探索して研究する時代に入ったのである。そしてさらに遺伝子DNAの断片を切ったり、つないだりして、他の異なる細胞に入れ込む技術であるDNA組換え技術が開発されたのであった。このようにDNAを主体とする分子生物学は生命操作技術へと進み、それまで不可能とされた高等生物であるヒトのDNAの解析的な研究への道が開かれたのである。これが生命科学のはじまりである。

DNAから出発した新しい内からの生命の探究である生命科学の目標は、ヒトの個体的生命の解明に向かうだけでなく、ヒトの精神活動の実体の探究へとその視野を広げるものであった。生命科学の発展はヒトの自然科学的研究に明るい未来と大きな可能性を予測させるものであったが、他方それに対する懸念をいだかせるものがあった。それは生命科学の発展が物質から生命そして精神へと向かう方向にあることを予測されたからである。そこに私はバイオエシックスと科学哲学の必要性を考えたのであった。

武見先生は生存科学において、とくに未来を予期する倫理を含むと同時に、人類の未来について科学的な研究に基づき、マクロのレベルとミクロのレベルの両方からのとらえ方の必要性を指摘したのであった。それを「未来からの反射」という用語で示したのである。

人間に関する生命科学の進歩や脳科学や行動科学の進展はヒトの生存に直接関与してくることから、生命倫理が深くかかわってくるのである。人間のための科学は、科学者のものではなく、人間のためのものである。このことは科学者の社会ならびに科学に対する責任である。

21世紀の科学技術のあり方



小泉 英明 Hideaki KOIZUMI

公益社団法人 日本工学アカデミー 副会長
株式会社日立製作所 フェロー

専門研究分野・活動

専門は分析科学・応用脳科学・環境科学。1971年東京大学教養学部基礎科学科卒業。同年(株)日立製作所那珂工場入社。1976年偏光ゼーマン原子吸光法の創出により東京大学理学博士。日立基礎研究所所長、技師長を経て、現在日立フェロー(役員)。また、東京大学先端科学技術研究センター客員教授を経てボードメンバー、東京農工大学経営協議会委員、(公社)日本工学アカデミー副会長、内閣府日本学術会議連携会員、中国工程院外国籍院士、フランス科学アカデミー LAMAP・豪州学習科学研究所・米国ROSS研究所国際諮問委員。(公社)日本分析化学会第55代会長(現在名誉会員)、International Mind, Brain, and Education Society創立理事、Mind, Brain, and Education誌(Blackwell社)創立副編集長、(独)科学技術振興機構領域総括・研究統括・研究総括、(独)国立環境研究所監事、省庁の各種審議会委員など歴任。

表彰

研究功績者・科学技術庁長官賞(1976)、全国発明表彰・科学技術庁長官賞(1983)、大河内記念技術賞(1977, 2000)、R&D100賞(米国)(2002)、大河内記念賞(2004)、日経BP技術賞大賞(2004)、日本分光学会賞(2012)、日本化学会賞(2013)、パピルス賞(2015)他。

著作等

論文・特許・国際会議発表:多数

著書に「脳は出会いで育つ:「脳科学と教育」入門」青灯社(2005)、「脳の科学史」角川SS新書(2011)、「脳科学の真贋」日刊工業新聞社(2011)、「童の心で:歌舞伎と脳科学」(市川團十郎と共著)工作舎(2012)、「アインシュタインの逆オメガ:脳の進化から教育を考える」文藝春秋社(2014)。

編著書に「環境計測の最先端」三田出版会(1998)、「脳図鑑21」工作舎(2003)、「脳科学と芸術」工作舎(2008)、「脳科学と学習・教育」明石書店(2010)、「乳幼児のための脳科学」かもがわ出版(2011)他。国内外の分担執筆多数。

キュリー夫妻(The Curies: Marry, 1867-1934, Pierre, 1859-1906)は1903年のノーベル物理学賞受賞式(ラジウム他の発見)で、記念講演を次のように締め括った。「科学自体は価値から中立です。科学から得られる結果を、善い目的に使用するのも、悪い目的に使用するのも、すべてはそれを用いる人間にかかっています。人間は、科学を良い目的だけに使用する程、十分に成熟しているでしょうか? 私は、人間がすでに成熟していることを願う者であります。」との趣旨をピエールは述べた。

よく知られるようにノーベル賞は、ダイナマイトの発明とその販売で得られた莫大な資産を原資に、科学技術の発展と平和を願ったノーベル(Alfred B. Nobel, 1833-1896)の遺言に従って創始された賞である。ダイナマイトは、大規模な治水工事を可能にして多くの人命を救った反面、戦争で使われて大量殺戮の道具ともなった。まさに諸刃の剣であり、科学技術の光と影の典型であった。

科学技術者の倫理の問題をさらに強く感じさせるのは、ハーバー(Fritz Haber, 1868-1934)の場合である。物理・科学・生物と全方位的な才能をいかんなく発揮したハーバーは、空気中の窒素の固定という夢の技術(ノーベル化学賞、1918)によって人工窒素肥料を開発し、増大する世界の人口を支える食糧生産に、極めて顕著に貢献した。しかし、その技術は、当時の爆薬に必要な硝酸を空気から製造することをも同時に可能とした。軍事技術に接近したハーバーは天賦の総合的な才能を使って、大量殺戮兵器としての毒ガス研究に没頭した。強力な新兵器の開発によって、戦争を一刻も早く終わらせ、犠牲を最少に抑えたいという信念からであった。このような希望が現実的ではないことは、常に軍備拡張競争に陥った歴史が明瞭に示している。

さらに、現在、科学技術は人造人間を生み出す可能性のある前人未踏の「生命操作」に踏み込みつつあり、新たな強い倫理の確立が焦眉の急となってきた。幹細胞技術のみならず「遺伝子編集」(Gene editing)などの生命エンジニアリングに関しては、倫理の問題がますます重要かつ深刻である。科学(Science)以上に、工学(Engineering)において、より倫理が必要となる根拠を述べたいと思う。

Reference

H. Koizumi, "Ethics-Based Engineering—Importance of Academy's Initiative toward Human Security and Well-Being", Pre-Dinner Talk (plenary lecture), CAETS (International Council of Academies of Engineering and Technological Sciences) Convocation 2015, New Delhi (2015)

環境倫理の過去・未来



加藤 尚武 Hisatake KATO

哲学者・京都大学名誉教授

略歴

東京出身。ヘーゲル研究者であるが、シェリングなどドイツ観念論全般についての著述もある。1979年哲学奨励山崎賞受賞。1980年代に〈バイオエシックス、生命倫理学〉を、日本に導入した。近年は環境倫理について積極的に発言している。

1968年・東京大学文学部助手。1969年・山形大学教養部講師。1970年・山形大学教養部助教授。1972年・東北大学文学部助教授。1982年・千葉大学文学部教授。1994年・京都大学文学部教授。1996年・京都大学大学院文学研究科教授。2001年・鳥取環境大学学長。2007年6月-2008年3月・東京大学医学系研究科生命・医療倫理人材養成ユニット特任教授。2011年・人間総合科学大学教授。2013年・人間総合科学大学特任教授。

日本哲学会会長(1999年 - 2003年)

主な著書

- 『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー 1991年)
- 『倫理学で歴史を読む—21世紀が人類に問いかけるもの』(清流出版 1996年)
- 『技術と人間の倫理』(日本放送出版協会・NHKライブラリー 1996年)
- 『現代を読み解く倫理学 応用倫理学のすすめ2』(丸善ライブラリー 1996年)
- 『子育ての倫理学—少年犯罪の深層から考える』(丸善ライブラリー 2000年)
- 『先端技術と人間—21世紀の生命・情報・環境』
(日本放送出版協会・NHKライブラリー 2001年)
- 『新・環境倫理学のすすめ』(丸善ライブラリー、2005年)
- 『資源クライシス だれがその持続可能性を維持するのか?』(丸善、2008年)
- 『合意形成の倫理学』(現代社会の倫理を考える 第16巻)(丸善、2009年)

有害廃棄物の累積、資源の枯渇、生物種の絶滅という長期的な傾向に対して、国際的な協調に基づく対策が効果を発揮することが、環境問題と呼ばれる課題である。環境倫理学は、そのために価値観をどのように調整するかという問題に取り組んできた。

- 1、自然の生態を大事にする。生態系の破壊を制限する。野生を愛する。絶滅が危惧される生物を保護する。都市化、工業化を制限する。
- 2、未来世代への責任を明らかにする。持続可能性を評価基準にする。再生可能資源に転換する。
- 3、地球圏が有限であることを資源利用・廃棄物処理に組み込む。生産、流通、消費、廃棄をクローズド・サーキットとして管理する。地球生態系への負荷(フット・プリント)を小さくする。

しかし、炭素系エネルギー消費系に水素系エネルギー搬送・保蔵体系が付加されることによって、地球の最後の石炭(褐炭など)が消費されるようになると、そのさい炭酸ガスの海底埋蔵に成功したとしても、資源が完全な枯渇に向かうことは避けられない。水素系の導入は温暖化を加速させはしないが、温暖化を防止するほどの効果はない。

国際社会の合意形成が、有効な温暖化の防止策を達成するまえに、大規模な生態系の劣悪化が進行している。政治的な指導者にとっては、短期的な経済成長の成果をあげることが、指導者としての地位を維持するために不可欠であるために、短期的には成長抑制となるような政策は採用できない。

修復医学に学ぶ生命倫理



浅野 茂隆 Hisatake KATO

医学博士、東京大学・早稲田大学名誉教授

略歴

サイトカイン研究、造血幹細胞移植、遺伝子治療研究の第一人者。医師になって最初に受け持った患者が白血病で、その後も白血病患者を診る機会が特に多かった。一生かかってでも白血病の患者さんを治せる医師になろうと決意。新しい医療を開発し、臨床の場で試用してその有効性と安全性を確認し、日常医療へ応用していくまでの一連の研究過程の中で企業と大学研究者の利益相反、グローバル医療の展開、初期臨床における倫理問題など様々な課題があることを痛感し、生命倫理の教育にも力を注ぐ。

1990年 東京大学医科学研究所先端医療研究センター分子療法分野
(旧病態薬理)教授
1994年 東京大学医科学研究所附属病院病院長
2000年 東京大学医科学研究所先端医療研究センター長
2004年 早稲田大学理工学術院特任教授、東京大学名誉教授
2014年 退任

・1990年 ベルツ賞
・1993年 日経BP賞
・2004年 文部大臣賞

・日本学術会議委員(第18期)
・厚生労働省薬事・食品衛生審議会専門委員

生命科学・技術の進歩は保健・医療の向上に必要なシステム医生物学の新知識を増大させる。しかし、不要になった死知識から脱却し新知識を応用する際には社会面、経済面、倫理面での新たに困難な課題に社会は必ず直面することになる。これらの課題を解決するために時代の進歩に合わせて必要となるのが先を見た保健・医療推進のためのパラダイム・シフトである。ポストゲノム時代に突入して遺伝子改変技術や胚細胞操作技術や高次脳機能改変技術などの生命人工操作技術が急速な発達しつつある現代、人間が直面する生の課題によって動機付けられた対象の計画、説明、評価である設計科学から複雑で流動的な社会における有限な空間における事象の関連性を時間的空間的な広い意味での大局観をもって科学する持続性科学への転回の必要性が叫ばれているのはこのためである。そこには未来医療の目標としての母子健康、就労年齢伸延、弱者支援が掲げられなくてはならない。

ところで、人間の高次脳機能は何百万年間も進化してはいない。記憶は世代を超えて一部は受け繋がれていくものの人間らしさを特徴づける欲望や感情の仕業で同じ失敗の歴史を何度も繰り返してきた。つまり、人間行動の社会的・科学的不確実性は人間の脳力ではいつまでたっても解消しない。そのため、上述したパラダイム・シフトが如何に望ましいものであってもそこに到達することは容易ではない。記憶容量を拡大させそれに基づく体系化の手段としての人工頭脳が発展してもそれは多くの場合歪みを伴うことになろう。他人の苦痛と不安の解消を考える医学者であるならば、その限界や矛盾を知りつつもそれに向けた努力を生涯怠るわけにはいかない。

これに関連して注目されるのが、一個の受精卵からの子宮内での個体形成と出生後の思春期までの高次脳機能、内分泌機能、免疫機能の成熟と自我とその後一生にわたって維持される外的因子による組織障害の修復過程であろう。そこでは多様で異なる機能を有する臓器、組織、細胞、分子などの複雑でバランスの取れた相互間作用という生体内ネットワークが存在している。このネットワーク・バランスは人間のように複雑に進化していない生物にも種の継続のために基本的に保持されているものである。それは普遍化すべき生命倫理的価値観の本質を語りつくしていると言っても過言ではない。また、私たちは内部や外部環境が疾患成立や老化機序に及ぼす長期の影響をそこから学びとることは少なくない筈である。

本講演では、世界最初の細菌・真菌感染症の予防・早期治療剤などに有用な好中球増加因子(G-CSF)の発見とそのバイオ医薬品レノグラスチム開発研究、その造血幹細胞移植などの修復医学への展開などの経験と発展性を踏まえ個々人の記憶や欲望や感情が作り出す価値多元社会の揺らぎが意図しない滑り坂現象を今後少しでも少なくする予測、予防、個別化、住民参加の保健・医療の重要性に関して持続性科学あるいはシステム医生物学の観点から提案しご批判を仰ぎたい。

会える別れと会えない別れ ～日本人の精神性から考える～



佐藤 雅彦

Masahiko SATO

大正大学講師・浄心寺住職

略歴

17歳の時、出家、得度。平成17年より文京区本郷通りにある浄心寺の24世住職に就任。ジョージタウン大学ケネディー倫理研究所客員研究員を経て、現在、大正大学で非常勤講師を勤めている。宗教家として現代のいのちの問題に取り組むため「日本生命倫理学会」「日本死の臨床研究会」などで活動している。末期がん患者や死を間近にした人々のベッドサイドを訪問したり、小中学校の子供たちにいのちの大切さを教える「いのちの授業」などを積極的に行っている。

著書

「また会えるさようなら～末期がん患者に仏教は何ができるか～」校成出版 2010年。他に共著あり。

DVD

「終わりのない生命の物語～7つのケースで考える生命倫理～」丸善 2013年

<私の立場から>

日本の仏教の世界は、〇〇宗、□□宗といった宗派の教えによって立つ「宗派仏教」とよばれることが多いが、ここでは、自身の宗派の話をするつもりはない。幼少時から自らの病気を通して「いのち」と向き合ってきたものとして、仏陀の教えと日本人の精神性から、これから未来に向かって生きるための倫理となりうる思索をお話ししてみたい。

<幸せに近づいていますか>

仏陀は、人の生きる世界を「娑婆」(シャバ・saha)という言葉で表現した。「忍土」や「忍耐の世界」と訳される。平易に言えば「苦しみの世界」だ。私たちの現代社会は、科学技術の力によって苦しみを克服していくための積み重ねがなされてきた。さまざまな病気は克服され、長寿を得られ、便利な生活は実現した。だが、しばしば「便利になったけど、不便な時代の方がもっと幸せを感じられたような気がする」といった言葉を耳にする。

人間が生きる世界から「悲しみ」は、すべて取り除けるのだろうか？ ある意味でいえば、便利さや快適さは、反って「悲しみ」に耐えられない人間を作り出してはいないだろうか。

<限りあるいのちを生きる>

さらに寿命は医療技術の恩恵のもと、長寿社会は進んでいくことが予測される。しかし永遠に生き続けることはなく、誰にも等しく死はやってくる。ましてや東日本大震災のように、多くの人々が一時に亡くなるような天災や事故に会うと、科学技術のみでは、人間の生きる幸せは実感できないことを、改めて思い知らされる。私たちにとって「よく生きる」とは、どのようなことを言うのだろうか。ともに考える時間を共有したい。

生存之法



太郎



公益財団法人**生存科学研究所**

〒104-0061

東京都中央区銀座 4-5-1 聖書館ビル 303

tel : 03-3563-3518

fax : 03-3567-3608

<http://seizon.umin.jp>

公益信託**武見記念生存科学研究基金**

〒105-8574

東京都港区芝 3-33-1

三井住友信託銀行株式会社

リテール受託業務部 公益信託グループ

Tel : 03-5232-8910